

川を救った下水道整備

「かつて浅見川の水は大変よごれ、手を入れることも憚られるほどでした」そう語るのは広野町での下水道整備を先頭に立って進めた元町長の根本重信さんだ。「私の中には童謡『ふるさと』に歌われる風景がありました。この風景を取り戻したい。その想いで下水道整備に取り組みました」。整備費用は当時で約68億円。批判もあったが、根本さんは根気よく町民を説いて回ったという。また、事業を効率的に進めるため、町の機構改革にも取り組んだ。その甲斐あって1993（平成5）年に浄化センターが竣工。下水道の供用が始まった。「大きな負担でしたが、良好な水環境を取り戻したことを考えると、あの時、やっつけてよかったと思います」と根本さんは振り返る。

町民に慈しまれる川

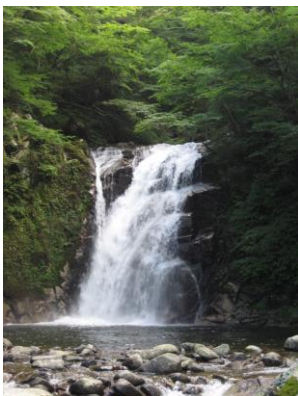
取り戻した清流を守ろうと活動しているNPO法人がある。“浅見川ゆめ会議”である。「根本元町長が浅見川上流の森林整備にも取り組んだこともあり、下水道整備と併せて川は良好な水環境を維持しています」とは浅見川夢会議の賀澤正事務局長だ。賀澤さんは根本元町長が設置した上下水道課の初代課長で、現在、浅見川ゆめ会議の中心メンバーとして活躍している。「私が子供の頃はウナギも捕まえることができました。それが楽しみでした」。すると「30か所仕掛けを作れば、3匹はかかったかな」と根本さん。「えっ！それはすごい。私のときは、100か所仕掛けて3匹くらいだったかな」とは賀澤さん。浅見川にまつわる思い出話でしばし盛り上がった。

未曾有の災害を乗り越える

2011年3月11日、東日本大震災による揺れと大津波が町を襲った。「処理場にいたいのですが、津波が襲ってくるといので急いで車で避難しました。しかし、避難中、津波が車のすぐそばに迫ってきました。とっさに車を捨てて常磐線の築堤に駆け上がりました。間一髪でした」と緊迫した状況を語るのは松本周次建設課係長だ。「翌日、処理場に行きましたが完全に津波に流されていました。そこで、簡易処理での放流を考えたのですが、原発事故で全町避難となってしまいました」そう語るのは坂本久男建設課長だ。「避難解除後を考え、簡易処理施設の設置を進めようとしたのですが、工事業者が見つかりません。放射能を恐れるからです。そこを請け負ってくれたのが地元の建設会社です。立ち入りが許される範囲の週3日、各日2時間ずつ復旧作業に当たってくれました」地元の建設会社の奮闘で簡易処理による再開に目処がついた。建設会社との調整や簡易処理による放流についての漁協との交渉は避難先で続けられたという。さらにその後、完全復旧へ向けて状況調査をしながら作業は続けられ、平成24年夏には震災から約1年半という速さで広野町の下水道は復旧した。

広野町の水辺を訪ねる

下水道設備や川の様子を見るべく、坂本課長、松本係長とともに現地へ向かった。最初に広野浄化センターを訪ねる。取り外され置かれている大きく曲がった水管橋が、僅かに被災の痕跡をとどめていた。今度は浅見川を上流へ。道幅が急に狭まり、ところどころに滝が見えてくると、広野町の水道水源の取水口にたどり着く。既にあたりは暗くなっているが、滝を流れ落ちる水の音が辺りに響き、水面が見えずともこの川を流れる水の清冽さを感じた。川を守るため負担を厭わず下水道を整備する。そして未曾有の災害の直後から関係者が団結して直ちに下水道を復旧させ、町の暮らしや水環境を守る。広野町の人々が川や地域の水辺に抱いている思いの強さを知った。



写真左より、浅見川の清冽な流れ、水質が回復した浅見川にはサケが遡上するようになった。右端の写真は東日本大震災直後の広野浄化センター。いずれも広野町提供